

日本人らしさ

後進性排除 (1)

日本のラグビーに対する課題が集約され、さらに分かり易く絞って「人気と実力の向上」という題目に要約されています。この両者は根を同じくする2つの花で、両者の目標達成のための、花を咲かせる基盤の風土とも言うべきものについて考えましょう。

JRFUとしても既に幾多の手がうたれています。プロ化やヘッドコーチに仏人を招き、トップリーグの試合形式の工夫などそれぞれに成果を上げつつありますが、根本的には、後進性を排してメジャーに迫り着き追い越すという視点から考察し対策を立てることが必須条件です。そのために、「日本人らしさ」を追求された経緯が過去にもありますが、改めて研究する必要があります。by, of, for そして自信を持つことです。好きこそ物の上手への道筋であり、普及発展への糧となります。このことは一般の全てのチームに対してもいえることです。

日本人は一般に器用で敏捷であることを特徴といわれますが、外国人も結構器用で敏捷です。それらには限界があり、圧倒的な差がない限りそれだけでは通用しませんから、この特徴の生かし方として、組みプレーや変化の組み合わせの工夫で不可能ではありません。

外国人に比べて身体が小さい点も指摘されますが、1999年 RWC で敗れてマッコミック主将が言い残したように、ラグビーは「サイズよりタフ」です。体格の劣勢は否定できませんが、以前から比べればその差は縮まってきています。求められるタフさと器用さや敏捷性を生かす方が大切なのですが、その点で「身体の接触を伴うラグビー競技」で、当ることを少なくするラグビーの研究の余地があります。

ジェフユナイテッド千葉のイビチャ・オシム監督は次のような面白いことを言っています。「走りまくるサッカーは、“身体をぶつけないプレーをすればいい”」。サッカー競技をよく見ると、ボールを蹴るだけではありません。身体全体特に上肢の強い力が必要であることが分かります。だから、接触時に負けないためにも、ぶつけないことが大切だということです。サッカー以上に身体の接触を伴うラグビーでは身体の高い相手に勝つために、フィットネスは勿論重要ですが、それだけでは満足な結果をだすことができません。

身体小さいプレーヤーが、ボールを持って必死で大きい相手に当たっていても、貴重なチャンスに、捕まって十分ボディコントロールもできないままにラックにするのが関の山です。タックルされないためのパントキックをもっと多用すべきですし、ボールを拾い上げないでドリブルで防御ラインを突破すること有効です。キックは effectively であること以上に、wisely であることが強調されているのはそのためです。即ち日本人にあったプレーやゲームづくりから出発し、夢と自信を持って立ち上がることが第一だと思います。

2005.12.29

西川 義行